新刊紹介

渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』の刊行

後藤重巳

別府大学創立四十周年記念事業の一環として、同大・渡辺澄夫教授編纂になる『豊後国荘園公領史料集成』全八巻の刊行が始まり、すでに、一昨五十九年十二月にその第一巻、六十年九月に第二巻が刊行され、斯界に好評を博している。

戦前から終戦直後にかけて、当時、大分経専（現大分大・経済学部）の教授であった故・田北学氏は、同氏の家系が、豊後大友氏の庶流に属する因由から、大友氏関係史料に関心を持たれ、『編年大友史料』二冊、及び『大友史料』二冊を、富山房書店、及び金海堂書店から刊行され、これが、豊後中世文書史料が〝集成刊行〟される嚆矢的な作業となった。これより前の昭和八年、清水正健氏は、帝都出版社から、『荘園志料』上・下二巻を刊行されたが、この事業は、国内荘園別に史料を集成するという未聞の大偉業ではあったものの、当時としても荘園にかかわるぼう大な史料を、網羅的に収載することは不可能で豊後国関係についても、代表的と目される史料のみの所収に終始した。

戦後、田北学氏は、前述の史料集に続き戦時体制下の学問的空腹をいやすかの如き姿勢のもと、『続編年大友史料』及び『続大友史料』の刊行を企てられ、これらは孔版印刷というまさに戦後経済を象徴するかの如き形の出版となって実現された。

昭和二十六年十月春大分県教育研究所内に同研究所の附属事業母胎として、大分県史料刊行会が設立され、いわゆる『大分県史料』の刊行が計画された。

この事業は、豊前国宇佐・下毛二郡を含む現大分県内に散在する、古代・中世期の文書史料を、集成刊行しようとする大事

業であり、昭和二十七年十月、『宇佐八幡宮文書之三』（永弘文書一）として、第一巻の刊行を見た。第一巻巻末所収の「あとがき」は、この「初子」の誕生にも似た快挙を、文調も震える興奮気味に記述していることは、実に印象的である。

この『大分県史料』の刊行事業は、順調とはいわれないまでも、第一期・第二期の史料刊行作業を続け、刊行会が解散した後は、大分県教育委員会の主体事業として継続され、第一巻の刊行以来、三十七巻の刊行をもって、昨年一応の幕を下した。

さて、一方、個人の研究事業として、田北学氏は、『増補訂正編年大友史料』の刊行を企画され、昭和三十七年十月、その第一巻を刊行以降、精力的な史料の編集刊行を続けられたが、第二十六巻の刊行を終られた昭和四十一年氏は逝去され、竹内理三博士の御尽力により続巻刊行が続けられ、昭和四十六年四月、第三十三巻（他に別巻二冊）の刊行をもって、この個人的大偉業は完結した。

さて『大分県史料』の刊行事業に、当初から参画した渡辺澄夫氏は、自身としては個別荘園研究の課題に精力的にとり組みつつあるうち、古代・中世文書史料の、単なる家わけ・編年集成作業に満足されず、個別荘園史料集成作業の必要を痛感されることになり、竹内博士・瀬野精一郎氏らとともに、『九州荘園史料叢書』の刊行を計画され、それは、『豊後国大野荘史料』・『阿南荘史料』などとなって結実した。

この間、渡辺氏は、日本土地制度史学界で大きな問題となりはじめた「荘園・公領制」の課題に対処するためには、これまでの史料集成作業に欠如している「公領史料」の集成も不可欠な作業と考えられはじめ、ここに、公領関係史料を加えた「荘園公領史料集成」が実現する結果になった。

今回、既刊の二巻を含めての、別府大学附属図書館刊行、渡辺澄夫氏の『豊後国荘園公領史料集成』の刊行に際し、竹内理三博士は、

日本荘園の研究は、二十世紀とともに始まり、長足の発展を示した。その間にあって、渡辺澄夫博士の均等名の研究は、荘園研究者としての博士の名を不動のものとしている。ただ二十世紀の荘園の研究では、古代国家体制のアンチテー

ぜとして理解され、そこを基点として、研究が進められて来た。しかし、二十世紀後半から、この理解は修正され、今日では、以前では荘園に侵食されて、殆んど影を失ったとされていた中世の公領も、荘園と並んで依然として機能していたことが指摘され、この荘園と公領と相並ぶ体制は、「荘園公領制」と呼ばれている。しかし、中世公領についての研究は、皆無と言ってよい。

公領史料についても、荘園についても、全国荘園を網羅した清水正健の『荘園志料』を始め、地域別個別荘園史料集が刊行されたが、公領史料集は、今回の『豊後国荘園公領史料集成』が嚆矢である。二十一世紀の学界は、この新史料集を範として新らしい中世研究が展開することは疑いない。

と述べられ、この種、史料集の刊行作業が、極めて大きな意義を持つことを力説されている。

別府大学の、この史料集刊行は、当初の四年間で全八巻刊行完成という計画から、やや遅れているが、全体の刊行計画は、続刊分を含め次の如くである。（ゴチは公領）。なお諸種の事情により、巻編成の若干の変更がある見込。

第一巻　国埼郡㈠…田染荘・田原別符

第二巻　国埼郡㈡…来縄郷・小野荘・都甲荘・草地荘・真玉荘・臼野荘・香々地荘

第三巻　国埼郡㈢…**国埼郷**・竹田津荘・伊美荘・岐部荘・姫島・武蔵郷・安岐郷・

第四巻　速見郡……山香郷・八坂荘（上・下・新荘）・日出荘（大神荘・藤原荘を含む）・由布院・朝見郷・竈門荘・石垣荘（弁分を含む）・鶴見村

第五巻　大分郡㈠…**荏隈郷**・勝津留・**笠和郷**・**判田郷**・津守荘・戸次荘・賀来荘・阿南荘

第六巻　大分郡㈡…稙田荘・高田荘

海部郡……**大佐井郷**・**小佐井郷**・**佐賀郷**（含佐賀関）・**毛井村**・**柴山村**・丹生荘・臼杵荘・佐伯荘

大野郡㈠…**井田郷**・**三重郷**（含宇目村）・**野津院**

第七巻　大野郡(二)…大野荘・緒方荘
　　直入郡……直入郷・入田荘・朽網郷
第八巻　玖珠郡……長野荘・山田郷・古後郷・帆足郷・飯田郷・玖珠荘
　　日田郡……日田荘・大肥荘・津江山

右の、全八巻に収録される内容からも判るように、豊後国八郡内の荘郷別史料の集成であり、先述の如く、その内容は、単なる荘園ばかりでなく、公領史料をも集録するところに本史料集成の持つ特徴がある。

さて、既刊の第一巻は、国埼郡(一)として、田原荘・田原別符関係史料が集録されたが、その内訳は、田染荘文書史料六〇一点、付録として、同荘域に属した近世期田染組の絵図写真一三葉のほか、現在の大字・小字表を加えた附録四件、また、田原別符史料としては、文書史料一〇七点、付録一件を収めている。

既刊第二巻は、国埼郡の(二)部に当てられ、来縄郷・小野荘・都甲荘・草地荘・真玉荘・臼野荘・香々地荘の一郷六荘関係の文書史料、及び附録が収載されている。各荘郷関係史料の内訳は、次の如くである。

来縄郷　文書史料二五八点、
小野荘　文書史料　八二点、附録二件、
都甲荘　文書史料一六七点、附録四件、
草地荘　文書史料　一三点、附録一件、
真玉荘　文書史料　四五点、附録二件、
臼野荘　文書史料　一七点、附録一件、
香々地荘　文書史料一七四点、附録一件、
　　合計七五六点、附録一一件、

周知の如く、古代・中世期文書史料の新所見ということは、今日では稀有の段階に至っている。そうした現状の中にありながら、本史料集には、編者の精力的な史料探索の結果によって、新史料も収載されている。

例えば、第二巻の来縄郷関係では、安貞二年(一二二八)の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録」は、従来『太宰管内志』によって、その内容を断片的にしか見ることができなかったものであったが、今回はじめて全容が本巻に収められた。また同様史料としての「六郷山異国降伏祈禱巻数目録写」(長安寺文書)等があり、これらは昨今喧伝される六郷満山史料の新史料として、おそらく同山研究の方向を一変するものであろう。

従来、この種の史料集は、当該時代以外の史資料に対しては、さして関心を示さない傾向が強かったが、編者は、時代のはるかに下る近世期の村絵図や、現在の大字・小字一覧表までも、附録として収載し、研究者の便を図り、今後に期待される諸史料集のあり方の範をも示されている。

本史料集の持つ意義については、今更、ここに多言を要しまいが、竹内理三博士は、第一巻に寄せられた序文の中で、田北学氏の『増補訂正大友史料』が、縦の豊後国史であるのに対し、本集は地域的に史料を集成した横の豊後国誌であると述べられている。

既刊二冊に続く残る六冊の完成が鶴首して待たれるところである。

尚、史料集成刊行委員会では、本史料集が、荘郷別史料集として、地域・割模的性格が強いところから、当初の全巻予約一括頒布方式から、僅少部数に限り、希望巻冊の分割頒布も行ない、利用者の便を図ることにした。その部数は、極く限定されているので、希望者は、早目に申し込まれたい。

(別府大学教授 [redacted])